

# 都市近郊農業で安心安全を どこまで追求できるか探求

やまだ らいす ふあくとりー (愛知県弥富市)



愛知県西部、三重県との県境となる木曾三川(木曾川、揖斐川、長良川)に広がる平坦な大地は、大都市・名古屋が目の前にある県内トップクラスの食味評価を受けているコメ産地だ。その中の河口部に位置する弥富市(2006年4月1日に、海部郡弥富町が、同郡十四山村を編入合併して誕生)でコメ・麦を生産する「やまだ らいす ふあくとりー」は、4年前からエコファーマー(国が定める「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」に基づいて「土づくり」「化学肥料低減」「化学農薬低減」を進めるための計画書を作成し、都道府県知事が認可した生産者)の認定を受け、農薬・化学肥料の低減を進めてきた。販売環境としては有利な立地にあるため、周辺でのエコファーマー認定農家はまだ限られた人数しかない。先駆けて認定を得た背景を聞くと「立地に甘えて努力を怠れば、どんな大都市の近郊で農業をやっているもお客様は逃げていきます」と同農場の山田博嗣代表は話す。今回は、田植えの時期を迎え(写真上)、21年産米生産に向けた取り組みがスタートした同農場をレポートする。





▲弥富市は名古屋に最も近い県内でもトップクラスの良食味産地。木曾三川の河口部に位置する

とし、農薬をほとんど使用しないコシヒカリを生産、看板商品としている。使用する牛糞堆肥は近隣では入手できないため、わざわざトラックで伊勢湾をぐるつと回って半田市まで行き、完熟堆肥をフレコンで運び込んで使用している。初穀をくわえての投入だが、有機物の分解を促進させるため、リサール酵産機（埼玉県さいたま市北区宮原町1-505-1 アイ第一ビル、電話048-668-3301、ファックス048-668-3301）が販売している嫌気性微生物資材「アイデンマック」を同時に秋に投入（嫌気性微生物の活動促進に必要な炭素も同時に散布）、秋起こしして土づくりの基本としている。

「土づくりから無化学肥料栽培、農業に頼らないコメづくりをもっと拡大したいのですが、圃場を地区内でローテーションしながら耕作するため、そのローテーションの中に含まれない圃場でしか付加価値の高い栽培ができないのが残念ですね」（山田代表）

生のままの堆肥でも圃場で分



●堆肥はもちろん、わら浮きの原因となる株元や生の糞糞まで有機物を圃場でそのまま分解・養分化できるほどの力を持つ嫌気性微生物資材「アイデンマック」。機械散布しやすい粒状になっている（写真左）。もちろん化学成分は含まれていない



解・堆肥化する嫌気性微生物は、酸素がない状態でも活動でき、その活動がもともと土壌の中にある微生物の活性化を図ることになる。そのため、ワラ浮きなどの障

害も皆無となる。くわえて、都市近郊での堆肥投入でも、臭気の問題で作りやすい環境づくりができる。「現在最大の問題は高温障害ですが、完熟堆肥とアイデンマックを使った土づくりで栽培したコシヒカリは、高温障害に対してもある程度被害を抑えてくれるよう



●20年産米の同農場の収穫風景。機械設備の大型化がすでに進められており、周辺農家からの作業受託も近年増えている

に思います。しかし、面積の拡大はできません。なので、密植を避け、植え付け・収穫の早いあきたこまちの拡大や、今年から始めた湛水直播でのデータ収集を行い、対策を立てている最中です」（山

田代表）

水については木曾川からのバイブラインが使えるので問題ないが、それでもコシヒカリの高温障害は悩みの種だという。農薬の削減では有機栽培に近い栽培方法を

とっている2つのコシヒカリのほか、すべての圃場を対象に微生物農薬・水稲種子伝染性病害防除材（クミアイ化学工業「エコホープ」）を使用、50〜200倍に希釈した溶液に漬けて消毒する無農薬消毒



●今年から試験的に導入された湛水直播による田植えの風景（4月26日）。カルバー（過酸化石灰を粉にしたもので、水に触れると酸素を出す。このカルバーで種もみを覆っておくと、水をはった田んぼの中でも発芽できる）処理された種籾が入ったタンクを田植え機にセットし、圃場に散布する

種子を使用、安心・安全なコメの生産を図っている。

その販路は、半分JAに出荷し、半分を直接販売。名古屋市内の飲食店や外食店にも供給している。大都市近郊での生産は、県内での評価で販路が増える時代から、近いために産地をすぐに見ることができるといふ利点に変わってきており、需要筋が栽培現場を見て安心できる農業が売れるコメづくりには欠かせなくなっている。その一例を「やまだ・らいす・ふぁくとりー」で垣間見ることができた。



▲農場のライスセンター前には、トラクターなどの乗用大型農業機械がズラリと並んでいた